

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	答客問（承前）：論説
Author(s)	内田，周平
Citation	龍南會雜誌， 5 4： 1 - 6
Issue date	1897-03-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4765
Right	

龍南會雜誌第五拾四號

論說

答客問

(承前)

教授 内田周平

既にして客復た問ふて曰く孔子の性相近、習相遠は本と性の善惡を論せし者に非るべけれど此言に據りて其意を推考するときは孔子の説は性善に歸するか性惡に歸するか如何

余答へて曰く勿論性善に歸すべし若し上知下愚を韓子の上品下品と同様に解釋すれば人の性には初めより善なる者あり惡なる者ありて性相遠となり又た習に移されざる者ありて習相近となり然るに夫子は習相遠と曰ふて性相近と曰へりその相近と云へるは即ち善的の性相近さを謂ひしこと疑ひなし

客曰是下の言の如く孔子の説が果して性善ならしめば孟子の見と相違する所なけん孔子は此處に於て何ぞ性相同也とか性一而已矣と言はざりしや孔子は性善説に弱點を有したるに非るか

余曰く性善説に就ては頗る込み入りたる解釋を要す今匆卒の際に之を了解せしむること難からん然れども是下の詰問こゝに及べば余はその大略を述べん抑も人の心は理と氣との妙合せる者にして性と云ふものは心の中に寄寓する理の名稱なり理と云ふ者は場處に因りて名を異にす天に在りては太極と云ひ人に在りては性と云ふ本然之性と云ひ氣質之性と云ふも畢竟性に二つあるに非ず若し二つ

あれば性に善惡あるなり。本然之性は理を氣の中より離して言ふ猶ほムキダシの水のごとし。氣質之性は理を氣の裏に合せて言ふ猶ほ茶碗の水のごとし。茶碗の中に在りと雖も水は固より水なり故に性と云ふ名目は氣に涉りたる上に立つものなれども性は矢張り理なり。孔子と子思、孟子の性を語る或は本然を主として言ひ或は氣質を主として言ひ或は本然と氣質とを兼ねて言へども性に二つあるに非ず。程子の性即理と云ふ語は確として動かすべからず。理には善ありて惡なし。性は即ち理なるが故に固より善なり。知らず足下之を領會するや否や。

客曰く本然氣質の説は従前聞く所の者と相違す然れども今之を考ふるに足下の解釋に従ふ方當れるに似たり但だ子思、孟子が言ふ所の性は多少相違あるが如し皆足下の解釋に従ふて撞著する所なきや否や

余曰く皆撞著する所なし。試に數學的の符號を用ひて之を顯せば、子思の天命之性、孟子の性善は、 $\square \parallel \triangle + \bigcirc$ なり。孔子の性相近は、 $\square \parallel \triangle + \bigcirc$ なり。又これを圖解にすれば左の如し。

上圖性

本然

下
圖
性

然質

子思孟子の性は上圖の如く本然を以て言ひ孔子の性は下圖の如く本然に氣質を兼ねて言ふ即ち一は未だ器の中に入らざる水にして一は既に落ちて器の中に在る水なり水に二色あるに非ず客曰く之を了解せり然れども貴説に従ふて性即ち善なる者とするは如何にして其性善より行爲の上

に惡が現出、來るや又孔子は何故に習相遠と云へるや敢てその所以を問ふ

余曰く理は氣と相雜はる者に非れども亦氣と相離るゝ者に非ず故に妙合と云ふ本然は即ち天命之性にして形而上の理なれどもこの理は離れて虚空に懸るものに非ず必ず形而下の氣に即して居るなり實際此の如く即して居るものなるを理論上これを離し去り特に提起して言ふものはその尊ぶ所氣に在らずえて理に在るを示さんがためのみ氣質本と惡(善に對するの惡)なるに非れども惡は毎に氣質に因て生ずるのみ之を譬ふればムキダシの水は本と純粹に清潔なり然れども水は物質を離れて虚空に掛る者に非れば之を受容する器物の精粗に因て不潔となることあり氣質に美惡あるは猶ほ器物に精粗あるがごとし清潔なる水を清き茶碗の中に容るれば固より清潔なり清潔なる水を穢れたる茶碗の中に容るれば水も亦不潔となるべし故に性の見方には二色あり之を數學的に表示すれば左の如し

美+善=性(是れ一色) 惡+善=性(是れ又一色)

(氣) (本) (氣) (本)

而して惡(善に對するの惡)の性より出づるを圖解すれば



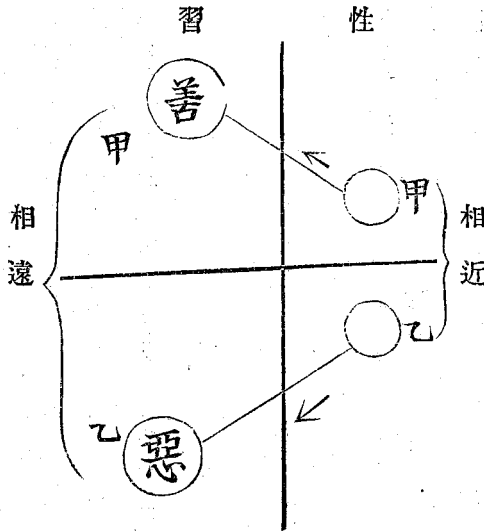
此の如くなるべし。美善是れ性の本体、惟習俗に至りては氣質の傾向に緣りて惡に溺るゝことあり、その本体と相去り相遠さかるに至るこれを習相遠と謂ふのみ性可以爲善、可以爲惡の謂に非るなり。若し性にして實際止た理のみか止た氣のみかなれば性相同と謂ふべし。孟子の性善の性は専ら天命之性を指して言ふ。天命之性は萬人同きなり。相近を以て言ふべからず。孟子の性相近の性は萬人同からず。天命を以て言ふべからず。然れども萬人の性相近き所以の者は實に一定の性善。其中に在るを以てなり。こゝに知る夫子の言は已に孟子の意を包該せることを。

客曰く足下の議論深く理窟に入りて甚だ了解に苦む。先づ問はん足下は氣質に於て美惡と曰ふて善惡と曰はず。美惡と善惡と其處に區別ありや。

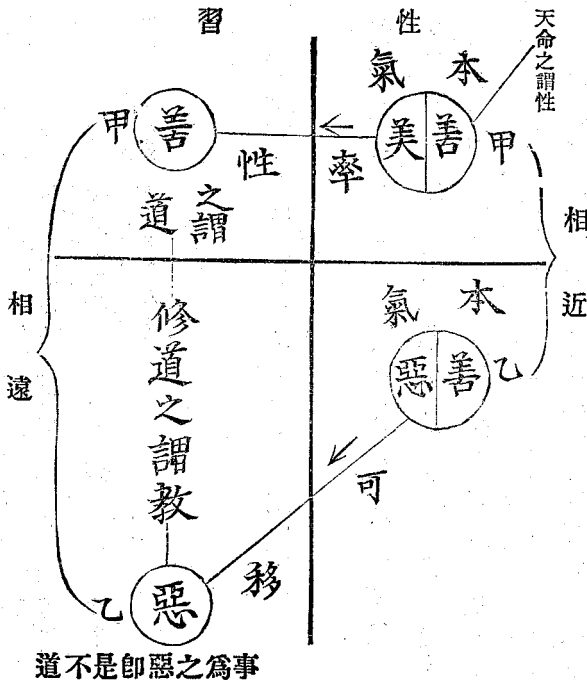
余曰く善哉問余は固より其意を區別して言へり。善惡の對言は禮義忠信と放僻邪侈との如きを謂ふ。美惡の對言に至りては是の如く重く且深き者に非ず。人の氣稟に正偏清濁明昏厚薄の齊しからざるあり。その正なる者清なる者明なる者厚なる者これを稱して美と謂ひ、その偏なる者濁なる者昏なる者薄なる者これを稱して惡と謂ふ。故にこの惡は或は語を換へて不美と謂はん。事爲の惡を以て氣質の不美と同一視すべからず。然れども事爲の惡は氣質の不美に緣りて生ずるが故に性の本体を語るときには氣質之性を除きて言ふ。氣質之性有弗性者焉と云ふも此が爲めなり。氣質之性が即ち惡と謂ふに非ず。惡は氣質之性に緣りて出で來るなり。

客曰く之を了解せり。然らば相近の性が相遠の習となるその關係を圖解にして示さることを得べきや。余曰く可なり。先づ參考の爲めに韓子の所謂中品を把りて説明をなすべし。

この甲乙兩者の性は相接近す但其本体は善か惡か本然か氣質か不明なり可導而上下と云へば善習に導かるゝ者は上り惡習に導かるゝ者は下りて相隔遠す



孔子の相接近相遠説は決して此れと類似する者にあらす之を圖解すれば左の如し



この章の意は人の性質には美惡の異なる者ありと雖どもその本原的性体(前に所謂天性)には善の同き者ありて甚だ惡き者あるなり毎に相接近なり惟習に至りて始めて惡に溺るゝありて本体の善と相遠かるのみ若し相接近を解して性は初め善惡の間に介すと爲さば大に夫子が易に謂ふ所の繼之者善成

之善性と抵觸す相近とは止た是れ惡の善と近きこと其好處よりして言ふ相遠とは乃ち是れ惡が本體の善と遠きこと其不好處より言ふ善惡未だ分れざるを以て相近となすに非ずして彼此殊らざるを以て相近となす善惡既に分るを以て相遠となすに非ずして習の性を離るゝを以て相遠となす若しこの性相近を解して善未だ必ずしも善に純ならず惡未だ必ずしも惡を極めずと爲さば此れ性無善無不善の説とならん若しこの習相遠を解して善に習へば則ち惡と遠かり惡に習へば善と遠かると爲さば此れ性可以爲善可以爲不善の説とならん若し又下章の上知下愚不移を解して賢愚靈蠢天性一定すと爲さば有性善有性不善の説とならん皆是れ吾が夫子の本意を失ふものなり

(未完)

塑像に現れざる希臘の人生觀 (承前) 在文科學大學 高 木 敏 雄

其 四

希臘塑像の特色として第一に數ふべきは、其全体の適合なること、平靜なること、各部の調和よろしきを得たることなり。節制メス・テ・ジ・ン並に平靜パ・ラ・イ・ス、余輩はこれをいかに解釋すべきか。ア、節制、實にいひ易くして、守り難きはこの節制なり。世界ありて以來、この節制を以て人生最高の理想とせざるもの、獨希臘國民あるのみ。節制に達するの途、唯一あるのみ。曰く精神と肉体との完全なる調和これ也。いかにして、この完全なる調和を得べきか。いかにして、内部の精神的目的と、外部の秩序との一致を得べきか。余輩は稍もすれば、精神と肉体との衝突を來し、遂に兩者の一方に勝を制せしむ。是に於てか、或は奢侈放恣に流れ、或は厭世非觀の人となる。たゞ希臘人にありては然らず、彼等は外部生活の幸福